

第 59 回 BS12 トゥエルビ放送番組審議会 議事概要

■ 開催日時 2024 年 1 月 24 日(水) 12:00~14:30

■ 開催場所 ワールド・ハイビジョン・チャンネル株式会社 会議室

■ 委員：総数 8 名

出席 (5 名)

委員 長：石田 寛人 (金沢学院大学 名誉学長)

委員：山下 東子 (大東文化大学 特任教授)

委員：伊藤 佳子 (プロゴルファー)

委員：坂田 康太郎 (株式会社 CAP 代表取締役社長/音楽プロデューサー)

委員：小林 千寿 (日本棋院 棋士)

※欠席の菅谷実委員、臼田誠次郎委員から書面によるコメントの提出があったので、委員のコメントの中にそれを含めた。

■ 放送事業者側出席者

代表取締役社長：降旗 邦義

社長 補 佐：須磨 直樹

編 成 部 長：生駒 裕之

人 事 総 務 部 長：酒田 順子

リスクマネジメント部長：西村 和晃

事 務 局：尾上 一也

■ 議事概要

代表取締役社長挨拶 (事業概要説明)

議題 1 諮問事項

「日本民間放送連盟 放送基準」、及び「衛星放送協会 放送基準」の改定について

事務局より、配布資料を基に、本改定の内容、経緯について説明し、本改訂は日本民間放送連盟の放送基準、及び衛星放送協会の放送基準が一部改正されることに伴い、本基準を準用している当社の「番組の編集の基準」の準用先を変更するものである旨説明して、放送法に基づき放送番組審議会に諮問した。放送番組審議会は改正内容に異議はないとし、改正は妥当であると答申した。

議題 2 2024 年 1 月以降の番組編成内容について

「プログラムガイド（2024 年 1・2・3 月）」、及び番組プロモーション映像に基づき、2024 年 1 月以降の番組編成内容について、編成部長より説明があった。

これに対して、委員から質問とコメントが出された。質問に対しては、事業者側が回答し、コメントについては、適宜、今後の番組編成に活かしていくこととした。

議題 3 審議番組「BS12 スペシャル『#つながひと ～わたし、義肢装具士になりました～』 について

審議番組について、ダイジェスト版を視聴後、合評を行った。

委員からの主なコメントは次の通りである。

- ・ 義肢の存在は知っていたが、その製作プロセス全体が映像化された番組を見たのははじめてであり、とても良い勉強になった。さらに、その義肢は、一生使用できるものではなく、5～6年に一度、交換を必要とするということも最後に紹介され、まさに、義肢を装着する人と、義肢装具士との付き合いは、一生の付き合いとなるということも学んだ。
- ・ 地味ではあるが、貴重な番組が土曜日午後 9 時というゴールデンタイムに編成されていたことも、注目すべきであろう。今後も、このような地味ではあるが、日常的には学ぶ機会の少ない情報を取り上げる番組のゴールデンタイムでの放送は、継続していただきたい。
- ・ 実際ご自身、両足を失った先輩装具士や患者さんの歩き方を拝見しているととても自然で、日常生活にも何ら支障はなさそうなので、義肢装具士の方々の仕事は、失った方々の人生を取り戻す本当に素晴らしい仕事だと思う。こうした仕事は先輩から技術を学び、また盗んでいく現代版徒弟制度のような教育が必要に思う。
- ・ 何を伝えたかったのかわからなかった。「義肢装具士がわずか」と 1 回のナレーションしかなく、需要に対して少ないのか、極端に少ないのか、全く足りていないのかわからなかった。できれば数的、相対的、ましてや国際的な指針、いわゆるファクトフルネスが番組で知りたかった。義肢装具士になるのは難しいのだろうが、教育システムの問題で難しいのか、需要と供給のバランスも、なぜ島根県の 400 人の町までいかなければならないのかわからず、どこに問題があるのか自分で調べなければならなかったのは残念であった。
- ・ 当社のドキュメンタリー番組は身近なテーマを取り上げているが、感情に流されず、足を切る切らないの判断やその選択肢など具体的な話を取り上げていただきたかった。
- ・ 装具士が 30 歳という若さで、試行錯誤されながらも幸せそうな様子だったことが素晴らしいと感じた。若い頃から生涯をかけて取り組む仕事に巡り合えることも幸せであり、

このような若者がいることがうれしいと感じた。今後就職活動をされる方や、現在の仕事に疑問をもっている方などにも見ていただきたい番組である。

- なぜ若い義肢装具士を取り上げたのかわからなかった。冒頭では腕が良い若きホープの印象であるが、他の職業で言えば30歳は独立するほどの時期であり、ようやくひとり立ちというのは遅い感じがした。義肢装具士業界全体の中の島根県太田市の位置づけなどの解説もあってよかったのではないか。ドキュメンタリーとしては平坦で幸せなストーリーであったので、先輩の装具士が主人公として取り上げ、若手を育てているストーリーが良かったのではないか。
- 義肢装具士というあまり光の当たらない職業に光を当てるという意義はあったと思う。マクロに見た時にどのようになっているかを今少し掘り下げたほうが良かったと感じる。糖尿病によって足を失う可能性について、現代生活の中で危険が潜んでいるということ、日常生活の中で絶えず事故に見舞われることもあり、人間一人ひとは小さな存在であるが、その中で生きているということを広い意味でアピールできたのではないかと思う。

以上